

十勝岳の火山活動解説資料（平成25年12月）

札幌管区気象台
火山監視・情報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ここ数年、山体浅部の膨張や大正火口の噴煙量増加及び地震増加や発光現象などが観測されています。また、山麓の温泉成分にわずかな変化が認められています。今後の火山活動の推移に注意してください。

平成20年12月16日に噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙などの表面現象の状況（図1-①～④、図2）

大正火口の噴煙は、今期間は火口上概ね100m以下で経過しました。大正火口の噴煙量は2010年頃からやや多い状態が続いています。

62-2火口では2006年頃から噴煙量がやや少なくなり、今期間は火口縁上100m以下で低調に経過しました。

・ 地震及び微動の発生状況（図1-⑤～⑧、図3）

火山性地震は2010年頃からやや多い状態となっていますが、今期間中は低調に経過しました。震源は62-2火口付近のごく浅い所のほか、グラウンド火口周辺や旧噴火口付近の浅い所に分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図4）

GPS連続観測では、2006年以降、62-2火口浅部の膨張を示すと考えられる変動が認められています。

より深部へのマグマの供給によると考えられる地殻変動は認められませんでした。

・ 温泉成分の状況（図5）

地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所によると、吹上温泉地区では、1988-89年噴火の数年前から見られた温泉のCl/SO₄（塩化物イオンと硫酸イオンの比）の上昇と同様の変化が、2012年からわずかながら観測されています。

この火山活動解説資料は、札幌管区気象台のホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。

この資料は、気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、北海道大学、独立行政法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平23情使、第467号）。

次回の火山活動解説資料（平成26年1月分）は平成26年2月10日に発表する予定です。

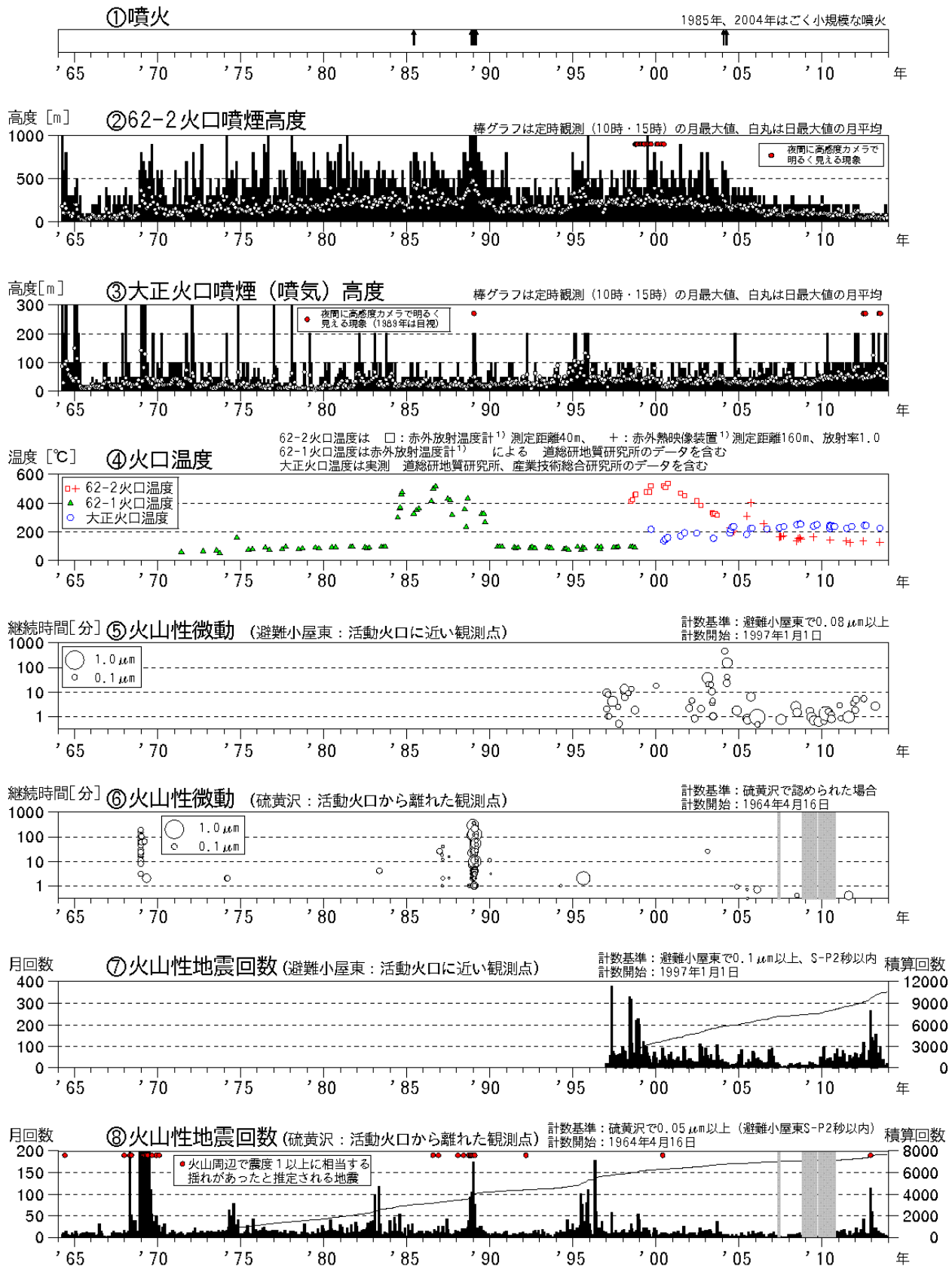


図1 十勝岳 火山活動経過図 (1964年1月~2013年12月)

⑥⑧: グラフの灰色部分は機器障害による欠測期間を示します

- 1) 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感じて温度や温度分布を測定する計器で、熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で熱源の温度よりも低く測定される場合があります。



図2 十勝岳 北北西側から見た山体の状況
(12月19日、白金模範牧場遠望カメラによる)

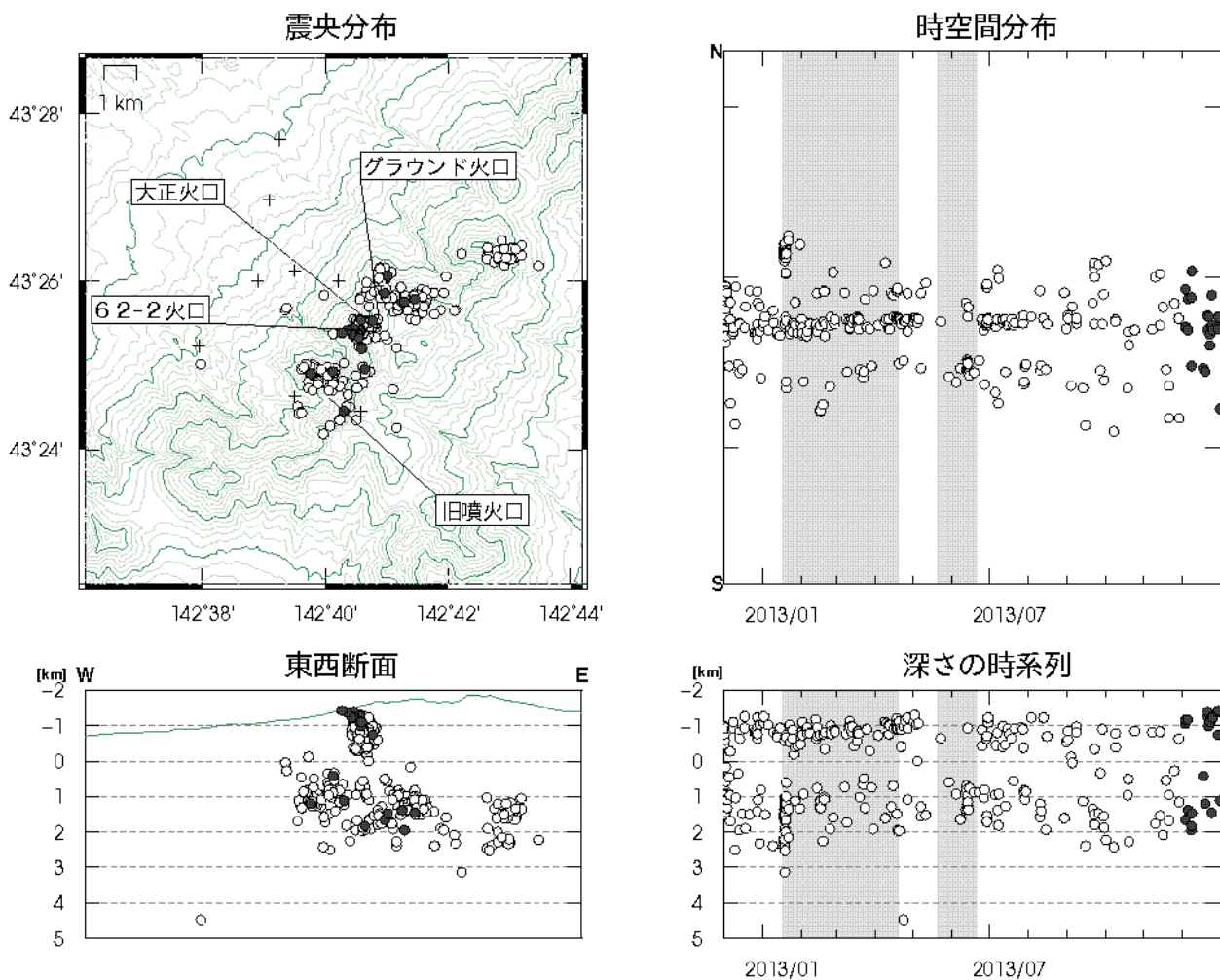


図3 十勝岳 火山性地震の震源分布 (2012年12月～2013年12月)
 灰色の期間は一部観測点欠測のため震源の決定数減少や精度低下が見られます
 ○印：2012年12月～2013年11月の震源
 ●印：2013年12月の震源
 +印：地震観測点

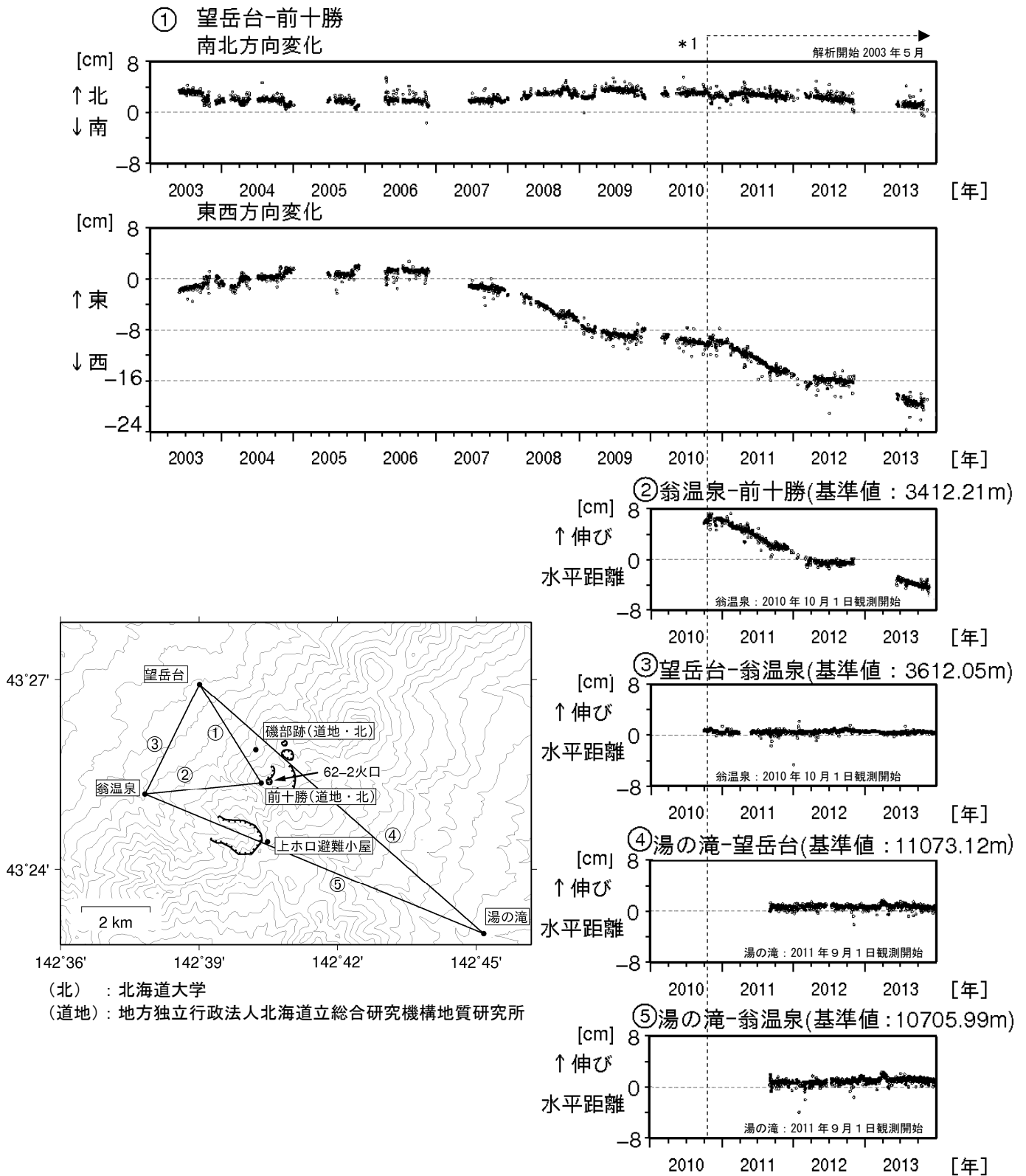


図4 十勝岳 GPS連続観測による基線長変化(2003年5月~2013年12月)及び観測点配置図

・GPS基線①~⑤は配置図の①~⑤に対応しています

・GPS基線の空白部分は欠測を示します

* 1 : 2010年10月以降のデータについては、解析方法を改良して精度を向上させています

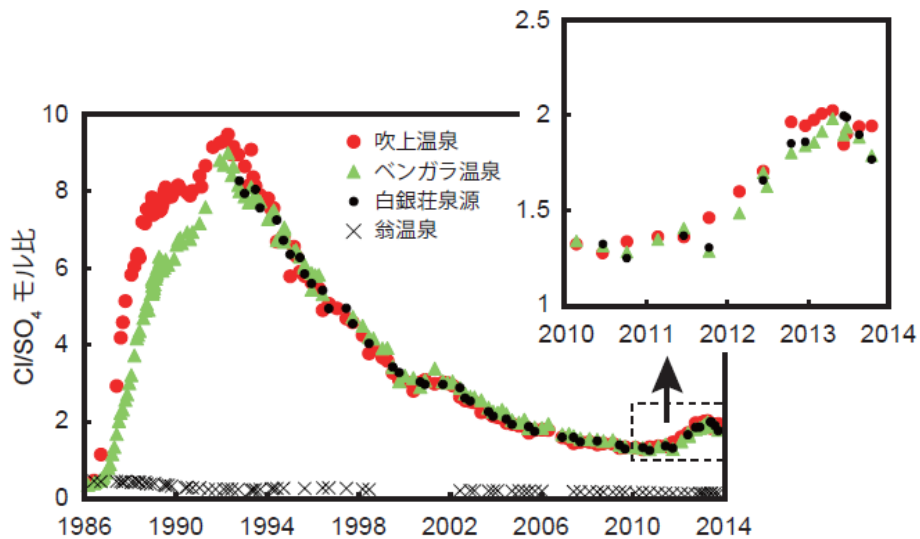


図5 十勝岳 温泉のCl/SO₄ (塩化物イオンと硫酸イオンの比) (1986年1月～2013年10月)
(地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所による)

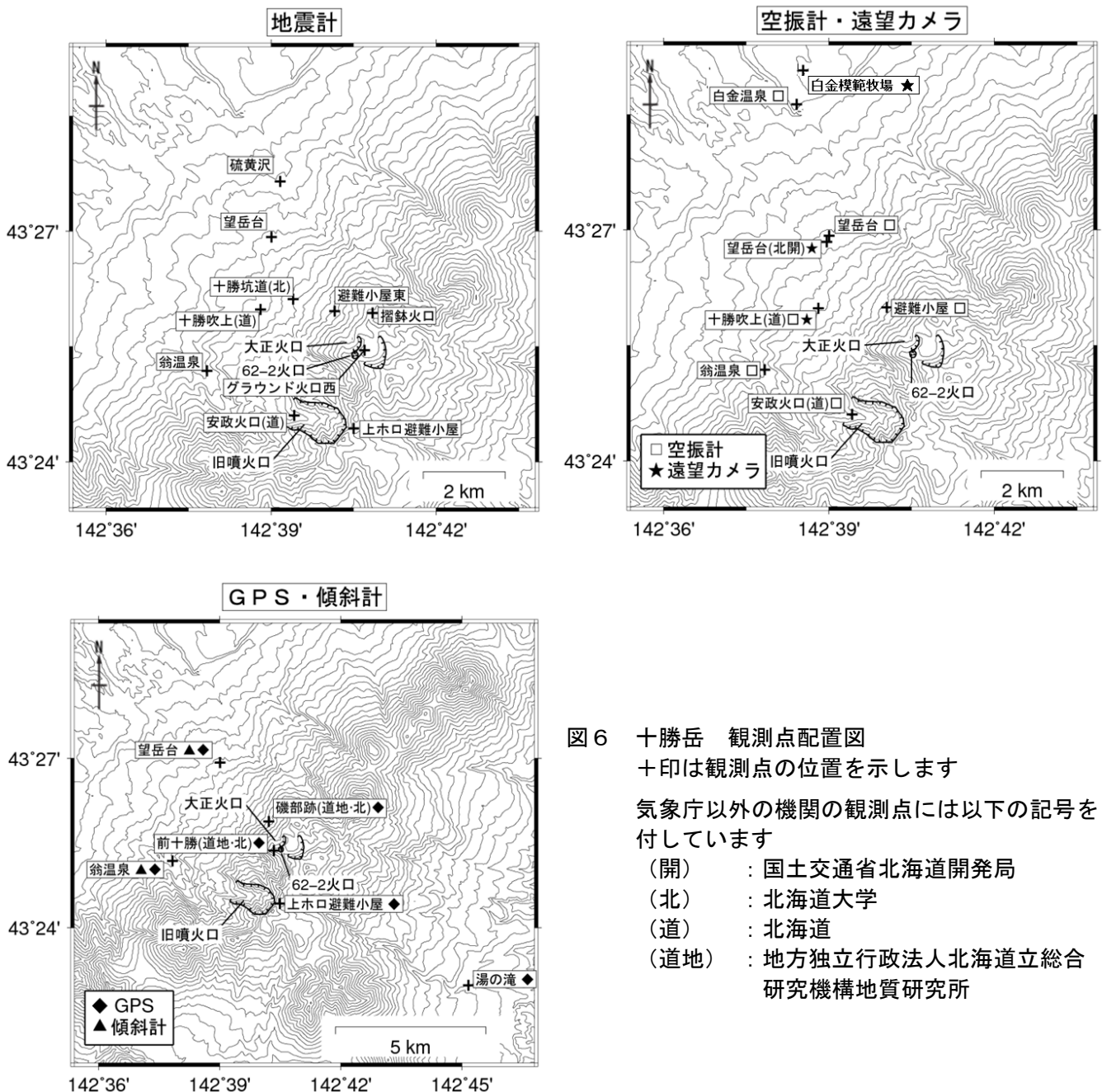


図6 十勝岳 観測点配置図
+印は観測点の位置を示します
気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています
(開) : 国土交通省北海道開発局
(北) : 北海道大学
(道) : 北海道
(道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所